

ホトトギス

昭和二十八年三月二十八日 運輸省特許局特許第六三三三号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回) 日発行
平成十六年十一月一日発行(第五百七巻 第十一号)

ホトトギス

十一月号



旬日記 汀子

平戌十五年十一月二日 関西ホトギス同人会

万葉の露けきものに逢はぬ晴
角切を終へし牡鹿の目と逢ひぬ
蜻蛉を透明に吸ひ上げし空
快晴の古都近づけて鹿と人
十一月二日 関西ホトギス俳句大会

深秋の時に日照雨をこぼす雲
まみえしは遥かなりけり初時雨
十一月三日 関西野分会

降り出し雨に鎖もる神無月
祀られし城主偲びぬ神無月
岳麓の荘の炉開早々と
旅終へて心切り替へ神無月
十一月三日 下萌句会

目の前の仕事の枷やそぞろ寒
文化の日雨の記憶のなかりけり
十一月十二日 大阪倶楽部

大方は隣の落葉掃いてをり
落葉踏む音の誘つてをりし庭
刺へ雨伴へる神渡
又落葉しぐれに行手阻まるる
初霜の消えて足音の残りけり
十一月十二日 綿業倶楽部

石路咲きて庭の一劃生れけり
咲く遅速間はすもいつか石路の庭
十一月十三日 清交社

予定表又一日消す小春かな
時雨雲青空こぼし日をこぼし
大根干す湖辺は風の通り道
近道の神社抜けて道七五三
雨止めばたちまち小春日和かな
十一月十四日 工業倶楽部

神無月とて賑はへる一日あり
初時雨こぼせし雲の所在なく
明日は又遠き旅立ち初時雨
鷹舞へるゆるぎなき空ありにけり
十二月十五日 九州ホトギス同人会

冬ぬくし一步に回顧ある温泉宿
境内は結婚式と七五三
さつきまで時雨れてあしと迎へられ
歳月の中に歳母あり冬の旅
還近の句碑の歳月木の寒降る
着崩れを直すテントも七五三
十一月十六日 第二句会

晴約す朝霧深き宿に覚め
日の射して来し障子を見てをりぬ
忌心の深き障子を閉しけり
所望せし今宵の宿の冬灯
十一月十六日 九州ホトギス俳句大会

短日の午後の予定の走り出す
この宿に又泊つはいつ冬の旅
十一月十七日 「大俳句会」三越劇場

落葉掃き寄せて夕影置きそめし
膝少し入れて炬燵の初対面
十一月十八日 有恒倶楽部

初霜のありし朝や旅帰り
鷹梢に孤高の翼たゞみけり
朝の間の風をさまりし冬日和
たちまちに木の葉しぐれとなる行手
鷹点となりゆく空のありにけり
吹かれ来し木の葉もありて掃かれけり
稍離れ木の葉は風に従へり
初霜にはじまる晴と信じ発つ
十一月十八日 無名会

冬めくと言ひ旅疲れ口にせず
朝の間の冬めく風の止みにけり
時雨忌やこれより日々を励まねば

旬日の旅冬めくを心して
人集ふとき時雨忌の心あり
冬めくや買ひたきものある出先
堆き櫛落葉の色を敷く
十一月十九日 夏潮句会

皆庭へ八手の花を素通りす
降り出して小春ひそめし庭となる
大方は黄葉の庭でありしかな
話したきことを心に抱く小春
術後よきことを心及び小春
柿鬪る人の若さを羨しども
今庭を人に見せたき黄葉かな
十一月二十日 摩耶山俳句大会

山寒きこと心せよてふ案内
冬山の錦の極みありにけり
露寒に山は彩り尽しけり
十一月二十三日 野分会

吹きすさぶ六甲の風神無月
炉開や若き命を惜みつゝ
十一月二十四日 ロイヤル吟行会

時雨ると予報の先に待つ峡路
息ひそめ雨の芒も曾爾のもの
十一月二十七日 きさらぎ会

それからはあるがままなり散紅葉
色尽くし散るほかはなし紅葉かな
風の音真夜覚めてをりしこと
ハンドルの受け風の山路かな
風を逃るゝ如くカーブ切る
散り尽くす風の紅葉に置く心
十一月二十八日 時雨句会

笠深く若者と見し鉢叩
一斉に日をひるがへす群千鳥
門に立ちぬしは或いは鉢叩
蓮根掘る泥とたゞかひをりしかな
十一月二十九日 句会と講演の会

風呂吹を煮返してをり旅帰り
風荒ぶ冬山にして残る色

四号車

稲畑汀子

今年の北信越ホトトギス大会は新潟県の十日町市で開催された。初めての私には新潟県と聞いただけで随分遠い地という感じであったが、東京から参加することになって新幹線を利用するとほくほく線を乗り継いでも二時間近くで着くことを知った。

「十日町へはどうやって行くん？ 切符は一緒に買っとこうか」
ホトトギス社の廣太郎から電話が掛かって来た。

「よろしく頼むわ。出来るだけグリーン車にしてほしいのだけど」

「よっしゃ。じゃあ、東京から東京への往復ね」

「そうよ。その日の内に芦屋まで無理でしょ」

「少し、ゆっくりせんと」

「うん、そうするわ」

新潟県の中でも冬は雪が深いと聞いていた十日町市はしかし明るい町であった。雪のない季節は他の町とはさほど変わった感じを受けなかった。雁木のある商店街や三階建ての家の構造が雪国らしいと言えは言えるかも知れない。道路が整備されているのが印象に残った。

一泊するホテルは東京のデイズニールランドの十倍もある土地の

中にあるそうで、落葉松の林、ジャーマンアイリスや芥子の花などが植えられた花園、広いゴルフ場に囲まれた明るいリゾートホテルである。サッカーの世界大会の時のクローアチアの宿舎になったとも聞いた。

梅雨の最中であるが二日目は気持ち良く晴れた。大会の朝はホテルの周りを吟行して歩くだけで結構様々な自然と出会える。蜻蛉の池、森青蛙の池、その先の落葉松の林まで行くと時間がなくなるので引き返さなければならない。朝早い時間には時鳥を聞いた人もいる。蝮に注意という立て札もある。野草の名前を河野美奇さんに尋ねながら山道を結構楽しんで歩いた。

美奇さん、保佳さんという東京方面への人達と帰路は同じ列車であることが分かった。

「夕食はどうするの？ その足で帰るのでしょ」

廣太郎に聞くと、食事は済ませてから帰ると言っているという。

「じゃあ、東京駅の近くで食べましょうか」

「うん」

東京に帰る人達は越後湯沢からの新幹線で車両は違うが皆同じ列車に乗り込んだ筈である。ホトトギス社で用意してくれた切符の九号車には三人乗った。美奇さんはグリーン車ではないが近い車両という。保佳さんは自由席の四号車だと廣太郎の携帯電話の連絡で所在が分かった。

「東京駅で皆さんに九号車の辺りへ集まって欲しいって連絡して

「よ」

「よっしゃ」

廣太郎が連絡を終えるともう上野である。

「あつという間に着いたわね」

東京駅へ降り立つと美奇さんの姿が見えた。保佳さんは四号車からだから少し時間がかかるだろうとホームで待った。

「おかしいわねえ」

そろそろ次の列車が着きそうな気配である。はっ！と気がついた。

「もしかして新幹線への乗り換えがうまく行かなかったのじゃないかしら？」

という私に廣太郎が

「でもさつき連絡したら四号車に乗ってるって言ってたよ」

「だって、違う列車の四号車かも知れないわよ」

「え！ まさか」

「越後湯沢で乗り換える所まで一緒でしたよ」と美奇さんが言う。

「もしかしたら！」

「まさか」

急に皆が笑いだした。

「さあ、廣太郎携帯電話！」

「もしもし、保佳さん、あ！ まだ乗ってはるんですか、えっ、二階の四号車に、あ、今もうすぐ上野ですか。プラットホームで

皆で待ってます」

「やっぱり！」

揃って東京駅を出る改札機を通つたと思つたら、バネに遮られた保佳さんの巨体がとうせんぼうさされていた。

廣太郎句帳

廣太郎

十一月十一日 刈谷市民俳句大会

旅心三河時雨に解きにけり

新海苔をばんと弾きて朝餉かな

喪心も少し冬めく大会に

思ひ出は尽きず山茶花又こぼれ

十一月十三日 土筆会

初霜を踏めば都心の音と思ふ

十一月二十四日 伝統俳句協会千葉県部会

その中の白鳥といふ孤高かな

平成十五年十一月一日 関西ホトトギス同人会

柿生りて子規の居さうな古都であり

花八手都心に鬼門なかりけり

冬めきて鳥語乾いてをりにけり

十一月五日 一水会

紅葉てふ古都の威厳でありにけり

初霜に土のぬくもりありにけり

大空を乱して鷹の舞ひ降りぬ
着地する鴨に油断のなかりけり
水脈作るより鴨浮寝解きにけり

十一月六日 蕉心会

秋惜む古都に都心に陸奥に

十一月十六日 囲む会

十一月二十五日 若水会

末枯を誘ふ嵐として隅田

一山を仏と分ち神の留守

縦縞の最後の勇姿文化の日

冬めきて靴音乾く都心かな

鹿の目のやうな佳人でありにけり

朝光を吸うて山茶花艶めける

薦紅葉いつもの猫は何処行つた

丸の内街路樹凜と冬日和

芭蕉稲荷大明神の留守に猫

十一月二十六日 目黒学園句会

萩散るや三角池を丸くして

稲城野の山高からず冬めける

下町の屋根鈍角に暮の秋

冬めきて鏡のやうな目黒川

十一月八日 伝統俳句協会茨城県部会

十一月二十日 登高会

へりの音零戦めきて冬来る

山茶花のほろほろと一周忌かな

石路の黄に乾き切つたる日差かな

神渡孕み白帆の滑りゆく

山茶花の一輪に床正されし

十一月二十九日 ホトトギス社句会

風呂吹の面取りに技ありにけり

雑詠 汀子選

眉山雪もよひ小諸の虚子をふと
徳島 上崎暮潮

折からの雪飛ぶ眉山初桜
健康といふ綱渡り梅の花
子の頃はぎしぎし摘みて遊びしと
福岡 松尾緑富

梅雨明の気配まだなく雷はげし
梅雨暗し細字読み取る灯点して
新緑に紫煙吸はれてゆきにけり
東京 稲畑廣太郎

牡丹の底より暮れてゆきにけり
大川の風夏場所を知らせくる
遊子の忌近づく紫陽花の雨よ
同 今井千鶴子

細き月沈みてよりの夜釣人
かけまくもかしこかりけり夕禊
一山を統べて孤高の朴の花
京都 安原 葉

現れし山の日朴の花の上
朴の花見ゆるところが山の寺
伴寺の跡を探して古都薄暑
檀原 稲岡 長

佳き夢の如くに夕焼冷めてゆく
一時間七十ミリの夕立かな

喜寿妻の母恋ふ雛を飾りけり
福山 竹下陶子

いみじくも雛あり日本の心あり
鶯の葉先生をつゝみ啼く
あたたかき手に引かれたる蛸狩
豊中 滝 青佳

蛸の火は星よりも生きてゐる
ひと山を潜れば秘境桐の花
麻服の感触の総身にあり
京都 粟津松彩子

船鉾の笛の音色に漕ぎ進む
船鉾の梶の螺鈿の古代色
道をしへ橋を渡つてをりにけり
東京 坊城俊樹

連結器切り離しては夏山へ
何某の開拓碑とや草茂る
太湖なる画舫のほとり柳絮とぶ
姫路 桑田青虎

作務衣にもありし今日より更衣
時鳥暗きたかぶりしわが山廬
万緑を揺らせはじめて着岸す
吹田 宮崎 正

一片の雪安達太良は夏の山
山百合の木蔭孤高を守り咲く
汗しつ汗の答案読んでゆく
神戸 三村純也

挨拶の喪主の影なき炎天下
平家落ちのびし潮路に海月浮く
星の夜も真つ暗闇も青葉木菟
東京 河野美奇

柄杓星傾き移り夜釣舟
朝かげの草放ちゆく露涼し

雑詠句評（十月号より）

弘子・仁義・基子

比奈夫・小木菟・雅

純也・一步・暮潮

昭代・弘子・汀子

物思ふとろりと暑き日なりけり 豊中 滝 青佳

まず、暑さを「とろりと」と形容した表現に注目した。それほどどんな「暑さ」だろう。本来暑さとは思考を助長するものではないから、決して息苦しいような暑さではないはず。この句は上五に据えた「物思ふ」の措辞がころよく次の「とろりと暑き日なりけり」へと繋がっていく。ところで暑さを「とろり」と形容した詩心の弾力性は作者の柔軟な精神を感じさせる。明治四十五年生まれ、今年七月には満九十二歳を迎えた作者である。今なお一流企業の経営に携わり、花鳥諷詠の道を歩む充実した日々を過ごす作者も、時折ふっと立ち止まりもるを思う。そんな作者の胸を去来するものは何なのか覗いて見たい気もする。若々しい精神と肉体が生み出す詩の世界はこ

よなく私も鼓舞してくれる。そんな一句である。（弘子）
とろりと暑いという表現は余り聞いたことがない。にも拘らずこの表現は実に多くのことを語っている。長く生きて来た人生の達人として今の世を憂い、またこれから進んで行く世を憂い、自分の豊かな経験から熱いエールを送ろうとしている作者の力に對してとろりと暑い日なのである。（汀子）

昼月の淡くかかれる花万朶 龍野 浅井青陽子

作者は、花万朶の美しさに唯々見惚れるばかりであった。そしてさらにその花万朶の景に、昼月がかかっていることに気付いた。花万朶に淡い昼月のかかった景を眺めて、そこに全く新しい美しさを見出したのである。この新しい発見の喜びにときめいている作者の心が、よく伝わってくる句である。（仁義）
桜の咲き満ちた時には美しい花のほかは目に入らないものである。世界がすべて桜に彩られ溶けそうに明るい中で作者は空に白く浮かんだ昼の月に気がついたのである。淡くかかれると言い、下五字で花万朶ともってきたことで一句の力に花の美しさが強調されたのである。（汀子）

（以下略）

若水集

廣太郎選

道をしへ・水中花

紅い花好きな子と見る水中花 横浜 高浜礼子
 水中花つと薄紅のあぶく揺れ 同 同
 海風のとどく窓辺や水中花 同 同
 幽冥の父母には逢へず道をしへ 浦安 岡田順子
 道をしへ影もさらへて消えてみし 同 同
 引き沈む夜市の灯色水中花 同 同
 宮内庁不問御陵の道をしへ 大阪 林直入
 道をしへたる制服を着てをりぬ 同 同
 神仏を問はず案内のみちをしへ 同 同
 道をしへ脚を舐めては振り返る 大牟田 有働清一郎
 己が影踏まへ思案の道をしへ 同 同
 灯の角度水の角度や水中花 同 同
 孤独なるさまに道をしへと私 静岡 鷺巣ふじ子
 道をしへ出遭ふも別るるも速き 同 同
 道をしへ心細さを知るごとく 同 同
 一人呑み一人寝る夜の水中花 岡山 富阪宏己
 水中花しだいに水の意のままに 同 同
 水中花ワインの彩に染まりけり 同 同

砂丘にも道らしきものを道をしへ 鳥取 中村襄介
 道をしへ火傷しさうな砂の上 同 同
 飛ぶよりも走る迅さの道をしへ 同 同
 水替へて影新しき水中花 西宮 本郷桂子
 星のなき窓は退屈水中花 同 同
 水中花窓辺の星に吐く噂 同 同
 開くこと踊ると見し子水中花 泉大津 脇牧子
 子はすぐに興味の外へ水中花 同 同
 子離れのつもり机上の水中花 同 同
 付くべきか付かざるべきか道をしへ悦子 熊本 内藤悦子
 逆らはず例へば水中花のやうに 同 同
 道をしへ背中ばかりを見せて飛ぶ 同 同
 道をしへには来し道のなかりけり 福山 竹下陶子
 俳諧の道は教へず道をしへ 同 同
 日本の水うるはしき水中花 同 同
 此の頃の気儘な暮し水中花 横浜 藤木和子
 珍しく夜の客あり水中花 同 同
 水中花パリーは朝といふ電話 同 同
 小暗さを保護色として道をしへ 八尾 山下美典
 一息をつくかにとまり道をしへ 同 同
 飽きらるる月日に咲きて水中花 同 同
 道をしへ教へてくれぬ時もあり 高槻 山口正秋
 祝杯をあげる居酒屋水中花 同 同
 水中花三連勝のタイガース 同 同

若水集句評 廣太郎

うなユニークな表現で季題の動きを捉えている。「道をしへ」の自由な姿が見て取れる。

開くこと踊ると見し子水中花 泉太津 脇 牧子

紅い花好きな子と見る水中花 横浜 高浜礼子

今回兼題の「水中花」は、御存知の通り人工の物であるが、その中に生命を感じる詠み方をしている作品が多かった。この句は子供の目を通した視点が描かれているが、子供は「水中花」を本当に生きていると思っているのかも知れない。「紅い花」が好きなその子供の興味、又花に対する愛情は、一緒に見ている作者共に見て取れ、人間の目を通してまるでこれ自体本物のように生き生きと季題が詠まれている句である。

宮内庁不問御陵の道をしへ 大阪 林 直入

昔、山の中で道に迷った人が困っているとふと前を、まるで自分を先導するように虫が跳んでいる。試しについて行くと、無事人里にたどり着けた。という故事からこの名前が付いた、と聞いたような聞かないような記憶があるが、そんな故事を踏まえたよ

最初の句と同じくこちらも子供から見た印象が詠まれている句であるが、水の中に入れてからだんだん形が整って行き、最終的には綺麗な花が開く過程を可愛く表現している。「踊る」という動きが花の開くスピードを微妙な感覚で表しており、読者の想像力を掻き立てる。子供の純真な心があればこそこのような美的感覚が生まれるのだろう。

道をしへ教へてくれぬ時もあり 高槻 山口正秋

身も蓋もないが、つまるところ結局はこれが正解ではないだろうか。「道をしへ」と人間に勝手に名前を付けられてはいるが、虫には虫の生活があるだろう。人間の側から見ているが、本来自然の生き物としての季題の自由な姿が、人間の側から見ているが故のペーソスも含んで見えてくる句である。(以下略)